

1 総合血液学検査装置 ADVIA2120 を用いた  
2 体腔液測定 of 検討  
3

4 ○森本愛 澤田朝寛 千木良紀子 江崎利恵子 喜  
5 納勝成 古谷津純一 石和久 (順天堂大学浦安病院  
6 臨床検査医学科)

7  
8 **【目的】** 現在、体腔液測定は目視法が主流であり、  
9 自動化測定が望まれている。そこで我々は、総合血  
10 液学検査装置 ADVIA2120 (ADVIA2120) における体腔  
11 液測定 of 検討を行ったので報告する。

12 **【対象および方法】** 当院検査室に提出された体腔液  
13 (胸水、腹水、穿刺液) 33 例を対象とした。方法は  
14 EDTA およびヘパリンにて抗凝固された体腔液を  
15 ADVIA2120 で測定した。白血球数については、裸核  
16 により算出される白血球数(WBCB)と、裸核を行わな  
17 い白血球数(WBCP)の二種類を対象とした。分画につ  
18 いては単核球(MN)、多核球(PMN)を対象とした。目  
19 視法については、白血球数は計算盤を使い算出し、  
20 MN、PMN については、スメア標本を作成し、ライト・  
21 ギムザ染色を行い分画を行った。目視法との相関は  
22 Spearman の順位相関係数を用いて算出した。

23 **【結果】** 目視法との相関において、白血球数は  
24 WBCB :  $r_s=0.90$ 、WBCP :  $r_s=0.89$  となり WBCB の  
25 方が良好な相関性を認めた。分画については、MN :  
26  $r_s=0.42$ 、PMN :  $r_s=0.61$  と相関性を認めたが、  
27 一部標本において乖離する例を認めた。

28 **【考察】** ADVIA2120 にて体腔液測定 of 検討を行った  
29 結果、白血球数において WBCP よりも WBCB の方が良  
30 好な相関性を認めた。ADVIA2120 の WBCB を使用する  
31 ことにより、クラスター形成を伴う細胞群やマクロ  
32 フェージなどの大型細胞についても裸核処理され、  
33 WBCP よりも目視法と一致したと考えた。MN、PMN に  
34 ついては、相関性を認めたが、一部標本において乖  
35 離する例を認めた。これらの乖離例については、細  
36 胞変性が著しくサイトグラムが乱れており、その結  
37 果乖離したと思われる。

38 **【結論】** ADVIA2120 を用いて体腔液測定 of 行った結  
39 果、日常検査において有用であった。(047-353-3111)